

## 大会参加記

東北大学大学院 大越良裕

私的なことで誠に恐縮なのだが、今年7月と11月の二度、私は和歌山県の熊野本宮大社を訪れた。山伏(修験者)を研究しているということもあり、7月によく念願がかなって訪れることができたのである。それ以来、気分はいつも熊野を向く生活が続くようになった。人生観が変わる出来事とは実際にあるもので、私の実家である岩手県一関市や現在住んでいる仙台市から眺める奥羽山脈とは山々の風貌が全く異なっている。それだけなら山梨県や長野県あたりの山々のいでたちを眺めれば、そこに暮らす人々の生活も異なるのだなということは実感できるのだが、7月の熊野本宮への旅(和歌山県新宮市から、十津川温泉を經由して奈良県五条市までバスでぬけた)は、少し、違っていた。確かに山の風貌も異なるのだが、それだけではなく、聳え立つ山々の脇を流れる熊野川の水流、その川と山との間に広がる(というにはあまりにも狭い、猫の額ほどの)川原、そしてそうした自然環境のなかで暮らす人間のたくましさを肌で感じることができた。そうした意味でも私にとっては衝撃的だったのだが、それ以上に言葉では言い尽くせぬような、つまり人間の力では及びもつかないような自然の持つ奥深さを肌で感じた旅であった。

こうして初心にかえることができた私であるが、日本史を研究する人間が何を勘違いしたのか日本村落研究学会に参加し、しかも発表することになった(した)のだからさあ大変。農村社会学が中心といわれるこの学会で、右も左も分からない人間が発表するのだ。見る人見る人見知らぬ人ばかり、鬼が出るか蛇が出るのかの心境とはこのことであった。しかも、自分は農家の出身だという誇りばかりがさきに立つ。しかしながら、そこはやはりフィールドに入って研究なさっている先生方が多いということもあって、そうした不安もすぐに発表前日の宿泊先で解消された。明けて翌日、いよいよ発表である。しかも、いの一番。それでいておそらくは大会史上最低の内容であることは本人が十分承知している。そうしたなかで、私のつたない発表に様々な質疑・意見を述べてくださり、あるいは最後まで耳を傾けてくださった諸先生方の、暖かくかつ厳しいご教示には感謝してもし尽くせないほどであった。それに報いるためにも、来年の大会報告にはそれなりの結果を出さねばと、かたく心に誓った発表であった。兎にも角にも、私の発表は終了し、プログラムにそって発表が進行していった。

次々と発表が進んで行くなかで私が興味を持ったのが、京大大学院の高村竜平氏の発表であっ

た。私の実家には小社(権現社という神仏混淆の社祠)があり、子供のころから民俗宗教と深い関わりのある生活環境のなかで育てられてきたということもあって、農業と宗教とのつながりには深い関心を抱いていた。こうした興味・関心が山伏(修験者)を研究するといった経緯に結びつくのだが、私は日本史を研究しているということもあり、つねづね資史料の見方・取り扱い方で苦労したり、またその限界性を痛切に感じる場面がある。そうしたこともあり、資史料をもっと厳密かつ体系的に取り扱わなければならない、という意識が最近では生じてきている。もう少し具体的に述べると、科学的・実証主義的なモノの見方をさらに科学的に分析し体系化していくモノの見方を構築する必要性を感じているのである。おそらくこうしたことは、議論され尽くしていることなのかもしれないが、私自身にとっては非常に大きな問題で、そういった意味でも高村氏の発表における、モノの見方には特に深い興味を持って耳を傾けることとなった。内容に関しては、私にはまだ他の研究者の方々を批評するという能力もないのでここではさげさせていただきたいが、村研大会全体の報告に関していえば、みな現代社会における農業・農村の存在に対して深い関心を抱いているとともに、今後のあり方に危惧を抱いていることを、一研究者としてだけでなく、一農業後継者として感じた大会であった。